Institute for Women's History & Culture
Kyoto Tachibana University

CHRONOS

「春の息吹」芦田聖太（本学健康科学部学生／写真部）

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼びおこすとされた橘の花の香り。
その橘を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）」。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の大空をはばたく鳥を
イメージしています。

クロノス［時の鳥］vol.43 2020.3

CONTENTS

〈巻頭エッセイ〉
趙孟頫と管道昇 ――一通の手札をめぐって
日本の伝統技術を守る 女性の進出 2
物語の女性 4
イギリス女性生活誌 43
近代日本音楽史を彩る女性たち 4
「女性の攻撃性」についての臨床心理学的雑感
母親の地位と男子の行方 ―藤原師実家を例として―
INFORMATION

趙孟頫と管道昇 ―一通の手札をめぐって

王 衛明
本学文学部歴史学科教授

中国書史の研究には、書作品＝人＝書風という思考図式がある。人とは書人の人間性を指すものであろう。そうであるなら、書風からはどのような人間的特性を捉えるべきか。ここでは元代の書人の手跡を、それにまつわる実話と併せて紹介することとしよう。

宋の皇族で、元の五朝にわたって中央省庁の次官級の人生を送った趙孟頫（一二五四～一三二二）が、恩師の天目山禅師中峰明本にあてた一通の手札（正式には尺牘という）が現在、国宝として東京静嘉堂文庫美術館に収蔵されている（図版参照）。

――孟頫合掌謹拝。弟子は不幸にして、正月二十日、幼い愛娘が亡くなりました。その哀しみに心が乱れ、どうしようもありません。人間の生死は無常なこととわかって懸命に気をとりなおしていても、亡き娘のことを思い浮かべますと、その悲しみが抑えきれなくなります。また老妻は殊にこの娘を鍾愛していたので、一度泣き出すと、その哀号の声が一日中止まず、聞くに忍びません。近く『金剛経』一巻を書き終えますが、どうか、恩師には冥々たる仏界において、この娘の霊を供養していただきたく、心からお願い申し上げます（後略）。――

娘の死は皇慶二（一三一三）年正月二十日、趙孟頫が六十歳の時に遭遇した悲しい出来事であったが、それだけには止まらなかった。二年前の至大四（一三一一）年には、長男の由亮が病いで床につき、数月後に十六歳で病死し、それから家中に仕える童僕三、四人もあいついで亡くなった。親族の命が相次いで奪われたこの三、四年とは、趙孟頫にとってどのような時期であったのだろう。参考文献に示した趙孟頫の年譜史料を吟味すると、この時期、彼はすでに皇帝の詔請を受けて職についたものの、故郷の呉興（現在の浙江省湖州市）で先祖の慰霊を行ったり、亡故した友人のための碑銘の書写が頻繁に依頼されたりしたため、妻と子供を携えて転々と南北中国間の過酷な旅を重ねていた。その結果、このような悲劇が家族にしのびよっていたのだろう。

さて、手札に伝える妻の管道昇（一二六二～一三一九）は、呉興に生まれ、姓は管氏、字を仲姫といい、春秋期斉の宰相である管仲の後裔とされる。生まれつき聡明で、才色兼備の素性をもち、特に詩文、書画に優れていた。しかし彼女にとって幸せだったのは、当時の社会習慣からすれば珍しいことだったが、夫の趙孟頫が彼女を正妻とした以外に妾を持たなかったことである。夫婦の間は対等で、互いに芸術創作に向けて努力し、文人の妻として、また母として夫を献身的に支える賢夫人であったという逸話が世間に広く知られている。彼女は二七歳の時に夫と共に上京し、以後一度も離れることなく夫に仕え、南北の移動にも同行した。延祐六（一三一九）年、長く足疾に悩んだ末、彼女は元の大都を離れ、帰郷の途中で急逝し、夫と子の趙雍はその霊柩を抱えながら故郷呉興に辿り着いた。趙孟頫が妻のために書いた墓誌銘には「夫喪賢婦、子失慈恃、家無内助」と、傷心の語が綴られている。管道昇の絵は清らかで、高尚の品性と女性的甘美な優雅さを発散しているが、しかしこの手札の背後には、寧ろ当時の過酷な世の中を懸命に生きた彼女の一面が読み取れる。

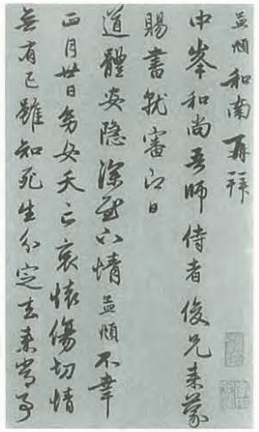
延祐五（一三一八）年、官途に疲れ果てた六五歳の趙孟頫は、妻の病いで落ち着かず、ついに帰郷を決意した。その時に作った「酬藤野云」詩に、

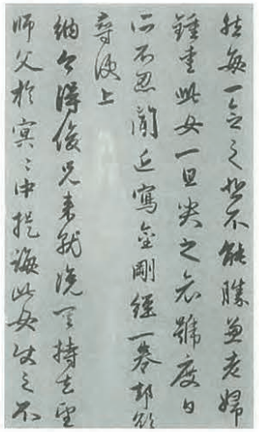
功名亦何有、
富貴安足計。
唯有百年後、
文字可伝世。

と、胸に秘めた座右の銘を伝えている。翌年、妻管道昇が亡くなると、傷心の日々を送る趙孟頫は、故郷呉興に引きこもり、体も徐々に衰弱し、日課の写経で妻を供養し続けた。この時期に中峰明本禅師に宛てた妻への思いを綴った手札数通が現存され、古代書作の逸品となっている。三年後の至治二（一三二二）年、彼は大勢の郷里学人に見守られる中、息をひきとった。二ヶ月後、東衡山原（現在の徳清県）で、夫婦の合葬が行われた。

改めてこの手札の書風を見ると、王羲之を彷彿させる純和な筆融と厳整な結構が混在しながら、老熟した力強さを加えた晩年の趣が垣間見える。この作品では、運筆の動きはやや荒々しいものとなり、「幸」字では不必要な一画が増えるほど乱れている。ここには筆者の嘆き悲しむ姿が暗示されているかのようである。

宋太祖第十一代の孫でありながら、元朝中央の一品官に抜擢された趙孟頫に対する評価は、中国社会の倫理道徳の尺度からして、無節操・無骨気の文人と後世の罵声を浴びせられた。顔真卿のような渾樸雄大な唐の忠臣を喝采する世間から見れば、趙孟頫の姿はけっしてそれと対等に評価できるものではなかった。しかし彼の、唐、宋以来の文人伝統をしっかり受けとめ、これを次世代に伝えようとする歴史的使命を背負った自覚が、彼を評価する際に念頭に置くべき最も重要な視点なのである。この手札から味わえる趙孟頫、管道昇夫婦の生き方や人間味の豊かさは興味深い。





［参考文献］
任道斌『趙孟頫繫年』（河南人民出版社、一九八四年）
単国強「趙孟頫信札繫年初編」
（『趙孟頫研究文集』所収、上海書画出版社、一九九五年）
『趙孟頫集』（浙江古籍出版社、一九八六年）
［図版出典］
任道斌主編『趙孟頫書画全集』第五巻、図版一五四
（浙江摂影出版社、二〇一七年）

日本の伝統技術を守る女性の進出 2

村上 裕道
本学文学部歴史遺産学科教授

2017年度のユネスコ無形文化遺産への提案物件として「『伝統建築工匠』の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が選定された（表1）。

文化財建造物修理技術者へのヒアリング

本稿では、14の伝統技術の内、「建造物修理」に着目して女性の進出状況を調べるものである。前号のその1でも述べた通り、女性技術者の就業は、既に40代以下では20％近くの構成率となっており、常態となっていると見て良い。今回は、女性技術者の中でも入社以来「現場」一筋で働いてきた小嶋はるかさんにインタビューを行い、彼女の足跡からこの分野における女性の仕事観等、その状況を看取しようとするものである。

小嶋はるかさん　重要文化財井上家住宅（岡山県）にて

小嶋さんは、1997年4月に美術系の大学を卒業して（公財）文化財建造物保存技術協会（以下、協会）に採用された。大学時代から共通絵画研究室主催の古美術研究旅行にスタッフとして参加し、京都の文化財を見学する等、歴史的建造物に興味を持っていた。そして、興味を活かす就職先として文化財建造物修理の分野を希望したという。しかし、求人情報を見てもくわしいことはわからず、最終的には、先輩を頼って話を聞きに行ったとのことである。夏休みに実習生として受け入れてもらい、初めて文化財建造物の修理現場を見た。

文化財建造物修理の印象

最初の印象では、古いことを扱うからすべて手わざの世界と思っていたが、90年代の中頃でもPCが扱えるかと聞かれて困ったらしい。一方、保存図ではケント紙に烏口（製図用のペン）で墨入れし、曲線部は箇所毎に自身で曲線定規を作ることを知り、両極端の世界に戸惑ったと笑う。

協会に勤務後、重文太田家住宅（広島県）、重文平井家住宅、同坂野家住宅（茨城県）、重文歓喜院聖天堂（埼玉県）等をアシスタントとして担当、2010年に初めて主任技術者として重文寛永寺旧本坊表門（東京都）の修理に携わった。そして、現在の大規模な重文井上家住宅（岡山県）の修理を担当している。

この間、入社時の1997年に養成研修を受け、1998年から2006年まで中堅職員として研修、2006年から2007年に一軒（ひとのき）の（簡単な）重要文化財を扱える普通主任技術者の研修、2013年に国宝まで扱える上級主任技術者の研修を受けている。16年間で文化財建造物修理技術者として国宝を担当できるまでになっている。自身の気持ちとして、職業上の昇進スピード等、男女差はまったく感じなかったし、実際差はないという。

彼女は、この分野において一人前と認められる上級主任まで昇り、かつ、現場一筋を通してきた初めての女性技術者である。彼女より前に採用された人達もいたが、退職してしまっている。

女性進出の課題

最後に、自身のキャリアを振り返って、この分野における女性の進出についての感想をうかがった。自身が入社した時は、トイレや更衣室等について、意識の薄い現場マンもいたが、今はほとんど支障を感じないという。彼女の態度には性差による甘えはまったくない。しかし、現場一筋が自身のみと言うことを考えると、子育て等の世代を迎えた時は、現場での勤務は男性以上に難しいと言わざるを得ないかと呟かれた。大事な一定期間、キャリアを持続できるよう移動のない部署への配置転換等が必要となるのであろう。ただし、文化財建造物の修理は、常駐修理を基本としており、組織的対応から見ると難しかろうことも理解できる。しかし、彼女のような優秀な職員に魅力を感じてもらうには、魅力を持続できる対応が必要な時代となっていることも事実である。

表1　伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術

	選定保存技術	保存団体	内　容
1	建造物修理	(公財) 文化財建造物保存技術協会	我が国における文化財建造物修理は120年以上の伝統を持ち、保存修理にあたる技術者には高度な専門知識に基づく技術が要求され、この修理技術は文化財建造物の保存には不可欠である。
2	建造物木工	(公財) 文化財建造物保存技術協会 (一社) 日本伝統建築技術保存会	我が国の建築技術は木工技術によって代表され、それは世界に類例まれなほど精巧な成果を示すものである。文化財建造物の保存修理にあたっては、各時代の木工技術の正確な踏襲、再現が求められることから古式の木工技術の伝承が不可欠である。
3	檜皮葺・柿葺	(公社) 全国社寺等屋根工事技術保存会	我が国特有の屋根葺技術である。檜皮、柿板で葺いた重要文化財等が多く保護されており、欠くことができない技術である。
4	茅葺	(公社) 全国社寺等屋根工事技術保存会	わが国では草葺の一種として古くから建造物の種類と地域を問わず広範囲に使用されてきた。重要文化財として茅葺の建造物を維持し、後世に伝えるには茅葺の技術は欠くことのできない重要な技術である。
5	建造物装飾	(一社) 社寺建造物美術保存技術協会	文化財建造物を装飾する技術には、漆塗、彩色、錺金具製作、鋳物製作、鍛冶技術等がある。これらの技術は建造物を装う意匠性だけでなく、部材表面の風化防止等の機能を担っており、継続的かつ効果的な技術伝承が困難となっている。
6	建造物彩色	(公財) 日光社寺文化財保存会	建造物彩色は仏教伝来とともに大陸から移入されたと考えられ、平安時代頃から日本的なものとして洗練され、華麗な発達を遂げた。さらに、桃山時代には漆を加えて豪華絢爛な彩色を施す技法に発達した。文化財の保存には不可欠な技術である。
7	建造物漆塗	(公財) 日光社寺文化財保存会	漆塗りは、彩色・錺金具とともに我が国の建造物を荘厳する技術として欠かせないもので、専門的知識や経験とともに熟達した技術が求められる。
8	屋根瓦葺（本瓦葺）	(一社) 日本伝統瓦技術保存会	寺院建築や城郭建築をはじめとする我が国の伝統的な建造物には本瓦葺が多く用いられている。本瓦葺の技術は、保存修理工事において最も重要な技術の一つである。
9	左官（日本壁）	全国文化財壁技術保存会	我が国の伝統的左官技術には、表面を土で仕上げる古式京壁と、漆喰仕上げとする漆喰壁があり、日本壁と総称される。日本壁製作のような湿式工法は避けられ乾式工法が一般化するなかで、良質な日本壁を製作できる技術者が激減している。
10	建具制作	(一財) 全国伝統建具技術保存会	建具の製作は、わずかな狂いやキズも許されず、極めて細かい神経と高度な技術、それに豊富な経験が必要である。しかし、古い仕様の仕事の減少とともに高度な技術を体得した者も希少となり継承が困難となっている。
11	畳制作	文化財畳保存会	畳制作技術は、多様な規模や形状の部屋を正確に採寸して、規格外の畳を加工し、特殊な紋縁の紋を合わせ、敷きこむ技術で高度な熟練を要する。伝統的な畳制作技術を有する技能者が激減している。
12	装潢（そうこう）修理技術	(一社) 国宝修理装潢師連盟	我が国伝来の書画類は四季の温湿度変化の影響を受けやすい紙や絹を主材料とするものが多い。これらの修理には、表具の解体、解装から旧裏打紙の除去、繕い、裏打替から表具仕立てへの工程を要する。伝統的な技術に裏付けられた装潢の技術が不可欠である。
13	日本産漆生産・精製	日本文化財漆協会 日本うるし掻き技術保存会	日本産漆は透明度、接着力、堅牢度等に優れており、漆芸の製作や漆工品等の保存修理に不可欠な材料である。また、漆樹を傷めず良質な漆を多く採取するには高度な技量が要求される。
14	縁付金箔製造	金沢金箔伝統技術保存会	箔打専用の手漉和紙を加工した箔打紙に金を挟んで打ち延ばし、金箔を製造する技法である。縁付金箔は極めて薄く、しなやかで大きく、色艶に優れ、文化財の保存修理に書くことのできない原材料である。

※文化庁記者発表資料『平成29年度におけるユネスコ無形文化遺産への提案候補の選定について（平成30年2月7日）』より作成

『狭衣物語』の源氏の宮

野村 倫子　本学文学部日本語日本文学科教授

『源氏物語』の成立後、その影響を受けた多くの物語が執筆された。『狭衣物語』もその一つで、斎院禖子内親王（一〇三九～一〇九六）に仕えた宣旨（六条斎院宣旨と呼ばれる）の晩年頃（十一世紀後半）の作とされる。

主人公の狭衣は、一条院や当帝と同腹の五の皇子である堀川の大臣の一人息子で二世源氏、母堀川の上は故先帝の妹で前斎宮、異腹の姉は当帝（後の嵯峨院）の中宮で皇子（後に東宮）の母という恵まれた環境に生を受けた。そして、母の姪で、故先帝の遺児である源氏の宮とは幼少期から兄妹のように育てられ、身近であるがゆえに逆に恋情を封印せざるを得ない状況にある。宮への思慕は、当帝から鍾愛の女二の宮降嫁を打診されても拒絶するほど強いものであり、狭衣の、さまざまな女性たちとの出会いと展開につねに影響を与えていく。

しかし、宮と結ばれなかっただけでなく、飛鳥井の女君との間に女児を、女二の宮との間には世に知られぬ皇子を設けておきながら、この二人とも結婚には至らなかった。心ならずも一条院皇女の一品の宮と結婚するが、気持ちはすれ違い、ついに打ち解けることはなかった。狭衣は道心と恋の間にゆれながら、次いで式部卿宮の姫君と結婚する。源氏の宮への想いが断ち切れず、遁世を試みようとした狭衣であったが、天照神の託宣を受けて突然即位することになり、皇子を産んだ式部卿宮の姫君を藤壺女御として、飛鳥井の遺児を一品の宮として宮中に迎え入れるが、心は安定することなく、人身位極まってなお立ち尽くす狭衣の姿で物語は閉じられる。

今回取り上げた源氏の宮は、女二の宮降嫁を辞退した狭衣から唐突に恋心を訴えられ、手を取られたところから苦悩し始める。堀川大臣家の養女という家柄の高さから東宮入内の打診もあり、新帝（後の後一条院）として即位した後の大嘗祭での賀茂川行幸に女御代として随行し、そのまま入内するとの噂が飛び交い狭衣を不安にさせる。ところが新帝の父である一条院が突然崩御したため、代わったばかりの新斎院が退下し、皇室は姫宮に代わって斎院を務める皇女不在の事態に陥る。堀川の大臣は、源氏の宮が幼少期に臣籍降下したのでその任に当たらないとしてそのまま新帝への入内を進めようとするが、賀茂の神の使いが宮に斎院を務めるよう促す歌を贈るのを夢に見る。この夢告げによって、源氏の宮は入内予定から一転、賀茂の斎院に決定する。

そもそも斎院とは、伊勢斎王である斎宮に対して、京の賀茂神社に仕える皇女をいい、嵯峨天皇の弘仁元（八一〇）年に皇女有智子内親王を立てたことに始まるとされる重要な職であった。

先行する『源氏物語』では、式部卿宮の姫君である朝顔の姫君が斎院に卜定されて斎院に入ったが、光源氏の求愛を拒んだこともあり、斎院御所が物語の舞台となることはなかった。『狭衣物語』では、狭衣生母の堀川の上が前斎宮であったほか、前斎院である嵯峨院の女一の宮が堀川大臣家の後見を得て、帝（後の後一条院）の後宮に入り、弘徽殿女御から中宮に至るなど、前斎宮・前斎院の結婚が描かれ、さらに潔斎のための初斎院や紫野での生活や賀茂社での源氏の宮についても詳細に描かれている。それは作者が仕えた禖子内親王が短い間（一〇四六～一〇五八）であったが斎院に仕えていたことと無関係ではなかろう。

周辺事情の紹介が長くなったが、父大臣が源氏の宮の後見を務めていることから、狭衣も斎院への奉仕という役目に向き合わなくてはならなくなる。そして奉仕のために宮に侍するたびに、神に仕える宮との距離を突き付けられ続けられる。

宮中の初斎院渡御当日の堀川邸、御手洗川の禊に出発する場面以降、狭衣は常に思慕の悲しみを抱えながら儀式の差配に当たる。宮を間近く感じるほどに思慕の念は高まる。その狭衣の真情を知らぬ父大臣は、斎院内に狭衣の「御宿直所」を設けるよう発言し、狭衣の辛さはさらにまさる。しかし狭衣の執着をいとわしいものに感じる源氏の宮は、斎院に入ると狭衣の執着を払いのけるように奥に入って対面しようともしない。やがて宮中での潔斎の二年を経て、本院（紫野の野宮）に渡御するのが賀茂祭の日でもあり、堀川大臣家では女房達が車で多数供奉する準備を進める。先だつ、御禊の日から差配を振るうのは狭衣である。しかし、賀茂神社に渡御し、神域で垣間見た源氏の宮の美しさに心が揺れ、斎院となった宮とは結ばれない現実を悲観し、現世を諦め、出家遁世への想いをさらに深める。

その現世離脱の想いが極まった時、狭衣は別れの挨拶のために斎院の源氏の宮を訪れる。宮はかつて思いを訴えられて嫌悪感を抱いたことを思い出すが、狭衣の切羽詰まったさまに思わず狭衣を案じる和歌を口ずさみ、その声を聞いた狭衣はまた決心が鈍りそうになる。そして、宮の前でこれを最後と思いを込めて演奏する琴の音に賀茂の神が応じて天変・神殿鳴動の奇瑞を起こし、狭衣の出家を止めるべく堀川大臣の夢に出現する。

狭衣は、やがて源氏の宮に相似の式部卿宮の姫君を「形代」として得る。その喜びを源氏の宮に伝えた狭衣であったが、宮はかえっていとわしく思い、宮からの心的距離は隔たったままになる。やがて疫病が流行し、帝の夢見も騒がしい頃、伊勢の斎宮に天照神の神託があり、狭衣の即位が決定する。直後斎院を訪れた狭衣は、ついに源氏の宮とは結ばれないという思いを実感する。

狭衣が即位しても斎院の交替はなく、源氏の宮は物語の最後まで斎院であり続ける。そして、帝となった狭衣は、行幸といういかめしい形でしか斎院に赴くことができなくなった我が身を嘆く。

狭衣即位は伊勢の天照神の神託、源氏の宮の斎院就任は賀茂神の神託とそれぞれ神の意志で選ばれた二人ということになる。天皇と斎院が政治と神事を補完する一対のものと見なせば二人の関係は完結しているといえるが、それは狭衣の期するものからは遠いものでしかなかった。

●連載●イギリス女性生活誌

第43回

一九世紀イギリスのレジェンド・ウーマンたち 4

―「看護の天才」F・S・クレイヴン（リー）―

松浦　京子
本学文学部歴史学科教授

レジェンド・ウーマンの話を始めるにあたってアグネス・ジョーンズとともに、看護の歴史のなかにその名を遺す女性として挙げたのがフローレンス・サラ・クレイヴン（旧姓リー）である。彼女もアグネス同様にナイティンゲール看護学校の最初期の訓練生であるが、活動期間は二〇世紀初頭にまで及ぶほど長く、その間に、組織的巡回訪問看護（ディストリクト・ナーシング）における看護師（ディストリクト・ナースと総称される）の絶対的ロールモデルとして、後に続く女性たちに影響を与えた女性である。また、彼女は、ナイティンゲールにとって理想とする看護師像の体現者として篤く信頼した女性でもあった。

巡回訪問看護。在宅療養者の元を定期的に訪問し専門的看護や助言を提供する活動は、近年日本でも各地に看護ステーションが設立されなじみのあるものとなってきたが、イギリスではずっと早く、一九四八年の国民保険サーヴィス制度（プライマリケア、治療、そしてリハビリに至るまでの包括的なイギリス版健康保険制度）の発足時点で主要分野の一つとなっている。以来、ディストリクト・ナースは看護ケア提供のみならずプライマリケアの担い手として地域社会に定着し社会福祉の重要部を占めてきたが、この公的サーヴィスの七〇年余の歴史以前に、巡回訪問看護は実は、一九世紀半ばの慈善的篤志組織の活動に始まる長い民間活動の時期を有している。この民間篤志組織による活動が制度としてイギリスに定着していく時期に大きな足跡を残したのがクレイヴンなのである。

慈善活動としての訪問看護、言い換えれば傷病の身を在宅で養うよりほか術のない貧困層に対して無償の看護ケアを提供する活動が一九世紀半ばに誕生したのには、本連載の一六回から二一回の間につづった「イギリスの福祉と女性」シリーズや「慈善活動とフェミニズムの気になる関係」などで述べてきたことが大きく関わっている。

すなわち、一九世紀のイギリス社会は未曾有の繁栄を誇る一方で貧富の差の拡大による深刻な貧困問題を抱えた結果、こうした事態に対して民間レベルの諸活動が核となる「福祉の複合体」と呼ばれる社会保障体系を生み出した。そして、「複合体」において中心的役割を果たしたのは慈善篤志組織活動でありその活動のなかでとりわけ大きな戦力となったのが中流階級女性であったのである。というのも、公的な社会活動から締め出されていた中流階級女性ではあったが、慈善活動は女性の本分的役割として奨励されており、女性自身も信仰心に基づく奉仕の精神や社会的貢献による自己確認・自己実現への欲求を持っていたため、数多くの中流階級女性が貧困層の救済活動に突き動かされていたからである。その結果、一九世紀半ばにはディストリクト・ヴィジティング、すなわち中流階級女性自らが、もしくは専従の訪問員を雇用して、地域の貧しい労働者家庭を定期的に巡回訪問し物資を配布したり、信仰、禁酒の勧めや生活改善のための指導を行ったりする活動が各地で展開されるに至っていたのである。

そして、こうした社会文化、伝統が存在するなか、リバプールの著名な男性篤志家W・ラスボーンが貧困層の在宅療養者への看護ケアの提供に乗り出す。その時彼が発想したことは、活動を支える仕組みには、中流階級女性のディストリクト・ヴィジティング組織のやり方を踏襲すること、そして、実際に貧困家庭に赴き看護に当たる者は従来のようなアマチュアの信徒女性やボランティアの女性ではなく正式な訓練を受けた看護師、トレインド・ナースでなければならないというものであった。ゆえに、彼はナイティンゲールに協力助言を仰ぎ、リバプールの病院に付属する看護学校を開設することから、はじめて訪問看護に看護の専門家トレインド・ナースを雇用する途をひらいたのである。

これ以降、巡回訪問看護の歴史には「近代看護の母」であるナイティンゲールが深く関わっていくこととなる。クリミア戦争の野戦病院での活躍から「白衣の天使」と謳われ一躍「時のヒロイン」となった彼女は、その活躍を讃えて募られた基金を元に看護学校を設立することを皮切りに看護改革を推進していく。と同時に、「トレインド・ナース」職を中流階級女性、言い換えれば育ちの良い教養ある女性（＝レディ）によって担われる専門職として確立するという思いも抱いていた。この思いは、上述した中流階級女性の社会貢献へ意欲、ひいては社会進出とも結びつくものであったと言えよう。そして、この思い、意欲が見事に現実のものとなるのが、実は巡回訪問看護活動であったのである。

その理由の陳述は次回に譲ることにして、ここではクレイヴンに話を戻したい。クレイヴンは、先述のとおりナイティンゲールから篤い信頼を寄せられ「看護の天才」と称賛されていた。彼女は、医師の娘に生まれ、一八六六年にナイティンゲール看護学校で看護見習い生として訓練を受けた最初のレディの一人である。そして、六七年から七〇年までの間、欧州各国（オランダ、ベルギー、デンマーク、オーストリア、イタリー、イギリス、フランス）の主要な病院を回り実地訓練を受け、そして、一八七〇―七一年の普仏戦争に際しては、プロイセン（＝普）側の従軍看護師に志願してメッツ目前の第十陸軍師団の伝染病対応野戦病院に勤務している。また、その功績から後にはプロイセン皇太子妃（ヴィクトリア女王の長女）の推挙もありハンブルクの王立予備役隔離病院の総看護師長を勤め、そして、七三年の北米大陸の主要病院の視察を経て帰国し、ナイティンゲールの奨めによって巡回訪問看護へと転身するのである。

このようなクレイヴンの出自や経歴は、育ちの良い教養ある女性であることにほかならず、またその華々しい実績はナイティンゲールが理想とする専門職ナースに相応しいものであった。そして、それゆえに、ナイティンゲールは、揺籃（ようらん）期にある巡回訪問看護を、在宅の貧しい傷病者の看護というある意味過酷で困難を伴う活動を、彼女に託したのであった。

伝説的ディストリクト・ナース、F.S.リー（クレイヴン夫人）
出典：Stocks, Mary, *A Hundred Years of District Nusing*, London,1960.

近代日本音楽史を彩る女性たち

4 明治楽壇の開祖 幸田延（その2）

佐野 仁美
本学発達教育学部
児童教育学科准教授

本稿では幸田延（一八七〇―一九四六）の帰国後の活動を追ってみたい。富国強兵の時代、経費節減のために、東京音楽学校は東京高等師範学校附属音楽学校となっていた。芸術家育成へと舵を切ったものの、現実にはまだ音楽教育が普及しておらず、小学校の唱歌教員の養成が求められていたのである。一八九八（明治三一）年からは東京帝国大学の哲学の教師であったドイツ系ロシア人、ケーベルが嘱託で雇い入れられた。ケーベルはモスクワ音楽院でチャイコフスキーに習った経歴を持ち、ピアニストとして当時の日本で抜きん出た存在であり、延は通訳をしながらレッスンを受けた。

独立の要望が高まって一八九九年に再び東京音楽学校となった後も、招聘されたユンケル、ハイドリヒ、ヴェルクマイスターなどの外人教師により、そこではドイツ音楽の伝統が保たれた。シューベルトの「未完成」などの本格的なオーケストラ曲が演奏されるようになり、徐々に曲のレヴェルも上がっていく。妹の幸がヴァイオリンで活躍するようになると、延はピアノの教授活動に軸足を移していき、滝廉太郎（一八七九―一九〇三）や久野久子（一八八六―一九二五）らを育てた。なお、幸は2番目の留学生としてドイツに留学した。滝もライプツィヒ音楽院に留学するが、病に倒れる。

延はウィーン時代に3楽章形式の未完の変ホ長調のヴァイオリン・ソナタを作曲し、それは一八九七年六月五日の学友会演奏会で演奏された。延の作品には、以後に作曲されたと考えられる1楽章形式のニ短調のヴァイオリン・ソナタもある。これらは池辺晋一郎の補筆により二〇〇六年に出版され、CDで聴くこともできる。前者は古典派風の様式で書かれ、後者は美しいメロディが印象的な初期ロマン派風の曲である。ウィーンで指導された点を考慮しても、音楽教育が始まってからわずか一五年しか経っていない作品であることに驚かされる。なお、変ホ長調のヴァイオリン・ソナタは二〇一九年一一月五日に王子ホールで行われた「日墺修好150周年記念コンサート」でも演奏された。

作曲とは、音楽が移入された後、音楽家が曲の様式を充分に消化した段階でようやく可能になる。唱歌が主であった時代に、ソナタという本格的な楽曲を創作した延は、突出した才能の持ち主であったことがわかる。従来、日本における作曲家は滝廉太郎から始まるとされてきたが、それより前の延の作品の存在がようやく知られるようになってきたといえるだろう。もっともヨーロッパでも作曲は男性の仕事と見なされ、クララ・シューマンらの作品に光があてられるようになったのは最近である。当時の男性主体の考えがうかがわれよう。

ヴァイオリンやピアノ、歌とマルチに活躍した延は主席教授となり、日本の音楽界で不動の地位を築くが、しばらくすると「上野の女将軍」「楽界の西太后」という批判が向けられる。たとえば、一九〇八年の『學界文壇時代之新人』の中のKT生による「幸田延子と安藤幸子」という文章では、世間の人々から尊敬されている音楽家には、延と妹の幸以外に多くは認められないとしつつ、著者は「音樂の本家たる歐米各國に於ける過去及び現在に就いて見るも音樂界の明星とも言はれ偉人とも稱へられたものは盡く男子たるを思ふと頗る異樣な感がある、元來日本の男子は音樂の才に缺けて居るのか、若しくは女子にのみ天才があるのか、將た男子に意氣地がないのか」と、日本では男性音楽家が出現しないことに、疑問を投げかける。そして、「音樂界と云へば直に音樂學校を思ふのは當然だが、此學校で最も勢力のあるのは幸田延子嬢だ、世間では兎角種々な評がある、或は延子嬢の横暴極まりなき振舞を痛罵する者もあるが、又或る者は天才と激賞して彼れ位の才があるから、少し位我儘をするのは當然だと辯護する。［中略］學校では笑顔もせず随分威張つて居らる、様子、其れも女子で從五位を授けられ東宮職御用掛や常宮、周宮御用掛を務めて居られるのであるから少しは氣取つて居なければならぬと思つて居るのかも知れぬ」と述べている。延は從五位に叙せられ、皇族の音楽教師を務めるなど、音楽界で並ぶ者がない力を持っていた。勝気な性格であった延は、反感を持たれやすく、妬まれることも多かったのだろう。男尊女卑の思想が強い世間から、延は根も葉もないような噂を立てられ、バッシングを受けたのである。音楽取調掛時代から女性が活躍していたものの、唯一の官立の音楽学校で長期間女性が君臨することは、注目を集めるとともに、何かと批難の的になりやすかったのであろう。

当時の新聞では、官立で唯一の共学であった東京音楽学校に関して、男女の風紀上の問題がゴシップ的に取り上げられていた。さらに、『東京朝日新聞』一九〇八年九月の「憂ふ可き音樂界」という連載記事では、芸術専門家ではなく、唱歌教員の養成にとどまっている音楽学校不振の原因を、技術においても数においても勝る女教師に求めている。その証拠として、芸人のように思われるという理由で、延が東京音楽学校関係以外の演奏を嫌がることをあげている。

このような厳しいメディアの論調の中、延は一九〇九年に休職に追い込まれる。ドイツからピアニストのロイテルが着任し、オルガンの島崎赤太郎（一八七四―一九三三）やピアノの神戸絢（一八七九―一九五六）が留学先から帰朝したという事情もあった。長期にわたる留学で恐らく大変な苦労をしながら努力を続け、日本の創成期の楽壇を牽引してきた延は、相当なショックを受けたことだろう。延は約1年間渡欧し、その後東京音楽学校に戻ることはなかった。（以下次号）

主要参考文献：
秋山竜英編著『日本の洋楽百年史』（第一法規出版、一九六六年）
幸田延「私の半生」（『音楽世界』第三巻第6号、一九三一年、33―42頁）
坂井松梁編『現在人物の研究』（春畝堂、一九一〇年）
千朶木仙史編『學界文壇時代之新人』（天地堂、一九〇八年）
東京藝術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第1巻（音楽之友社、一九八七年）
東京藝術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史　演奏会篇』第1巻（音楽之友社、一九九〇年）
萩谷由喜子『幸田姉妹』（ショパン、二〇〇三年）
平高典子「幸田延のウィーン留学」（『論叢』玉川大学文学部紀要第53号、二〇一二年、101―121頁）
やすを生「樂界の西太后幸田延子女史」（『日曜画報』博文館、一九一一年六月号14頁）

「女性の攻撃性」についての臨床心理学的雑感

ジェイムス 朋子　本学健康科学部心理学科准教授

筆者の専門のひとつは、「女性の攻撃性」の発達に関する臨床心理学研究である。「攻撃性」と言うと何やら恐ろしく聞こえるが、精神分析学においては、攻撃性は性愛性と並ぶ二大本能エネルギーの一つであり、フロイトはその最も成熟した姿として「愛すること」と「働くこと」という言葉を残した。すなわち、攻撃性は、破壊性のような原始的なエネルギーから、怒りや主張性といった生きる上で必須のエネルギー、さらには、生産性や創造性のような成熟したエネルギーとしての発揮まで、様々な人の営みの根源にあるものとされている。

臨床心理学研究はすべからく日々の心理臨床実践の中で仮説検証を繰り返すことによって生成を続ける学問である。精神分析的心理療法を仕事とする筆者は、心身の変容に出会う思春期に迷い、怒り、落ち込み…といった壁にぶつかる若い女性たち、自身のアイデンティティの揺らぎの中で飛躍的成長を図ろうと葛藤する青年期女性たち、社会の中で働く女性として、次世代を育てる女性として様々な危機に出会いながらそれを成長の糧として前進する女性たちの心理療法を実践してきた。また時には、不遇な生い立ちや犯罪被害の中で、自身の攻撃性の発達において過剰に受身になったり、慎重になったり、攻撃的になったり、自己破壊的になったりといった複雑な対処の鎧の中に自分を閉じ込めてしまった女性たちの回復の援助や、人格発達の過程で非行や犯罪といった形にまで攻撃性の放出の仕方を変容させてしまった女性たちの犯罪防止プログラムの開発などに携わってきた。女性は、その生物学的・身体的な特性に加えて、文化的・社会的な影響も加わり、攻撃性を成熟させていくプロセスが男性に比して複雑であると言われている。筆者はそういった日々の心理臨床の中で、女性たちが自身の攻撃性に向き合い、それを育み、慈しみ、テイム（飼いなら）し、自分自身のエネルギーへのオーナーシップを明確に体得して、それを自身の魅力として成熟を進めるプロセスに立ち会う機会をいただいてきた。

ある女性がいた。その女性は、夫の父親が亡くなると鬱になり、農業を営む家業も、主婦として切り盛りしていた家庭も、子育ても、思うようにいかなくなってしまった。夫の父親は昔堅気の人で、どちらかといえば距離のある関係だった。しかし夫の父親が亡くなったとたん、地元の慣習行事は急に意味のないものに感じられ、夫の母親は疎ましく感じられ、夫が物足りない男性に思えるようになり、子育てに不安を感じるようになった。また同時に、そんな自分が嫌でたまらなくなった。それまで安定していた世界が一変したように感じ、彼女はひどく遠方にある筆者の勤める研究所付属の心理相談室に来談した。夫の母は「なんでまたそんな遠くまで」と反対した。しかし、「国際的」で「科学的」な学術雑誌への研究成果が記載されたホームページひとつでその遠方の相談室を選択した彼女を、夫は応援した。彼女はかつてある大学の農学部で学び、貧困地域の農業改革分野で国際的に尽力したいという夢を持っていた。都市部の大手企業重役だった父と専業主婦だった母には眉を顰められる夢だった。同じ農学部で学ぶ夫と出会い結婚した時も、両親はあまり賛成ではなかったようである。心理療法を求めて訪れてきた彼女は、清楚さと実直さと愛らしさと頼もしさが感じられる女性だった。一方で、農業家にも、国際的活躍を夢見る女性にも、都市部のセレブな女性にも、平凡な母親にも見えなかった。話をしていると、落ち着いた佇まいの中に、彼女の際立った知性、進取の気性、誠実さと大きな不安が感じられた。1年ほどの心理療法過程を経て彼女は、夫や家族を愛する自分、コミュニティを愛する自分、作物や自然を愛する自分、仕事を愛する自分、挑戦を愛する自分、自分自身を愛する自分への能動的な実感を取り戻した。彼女は大学進学、結婚、職業選択と、その時々の決断を経て、自身の攻撃性を「働くこと」へと昇華し、大事な人たちを獲得し、「愛すること」を育んできた。しかし無意識では、状況依存的に、あるいは反動的な勢いで決断してきたという不安が混在していたようである。そしてその根底には、彼女の攻撃性に基づき培われた「働くこと」の有能さに対する彼女自身の受け入れられなさがあった。その不安が、「愛すること」をも揺るがすことになった。夫の父は、静かな大きな存在感を放つ人物であり、その死は、彼女が無意識に抱えていた自身の攻撃性の大きさに対する不安に直面せざるを得ないきっかけになったのである。

「見るなの禁止」というタブー・ストーリーがある（パンドラの箱、イザナミとイザナギ、鶴の恩返し等）。精神分析家の北山氏は「恥」に関わる日本特有の力動を見出し、興味深い説を展開している※。筆者はその中に、女性特有の「受身性」のテーマもあるように感じている。受身的世界（＝見られる世界）に埋没する中では、能動的に創造する感覚も愛する感覚も明瞭さを欠いてしまう。先の女性と筆者が安全な心理療法空間の中でどのような対話を繰り広げたのか、その詳細をここで開示することはできないが、心理療法空間の中で彼女は存分に攻撃性を遊ばせ、飼いならし、コントロールし、自分のものとするための特別な時間を体験したことは断言しよう。彼女のような女性たちとの仕事を経る中で、「見るなの禁止」のテーマは大きなエネルギーを有する女性自身や社会の受容プロセスの複雑さ、そしてそれ故の大きな魅力を示すストーリーであるように筆者には感じられるのである。

「女のくせに」といった言葉が使われなくなった今日ではあるが、世間は優しさの価値への傾倒を強めているように感じる。若者たちは男性も女性も、無難で安定した進路を望むように見える。出る杭があれば打とうとするよりも遠ざかる。他者に合わせられる能力は称賛され、自己主張する時にはスマートさが求められる。自身の攻撃性を飼いならし、成熟させるプロセスをゆっくりと泥に塗れて悪戦苦闘できるような土俵を、社会は若者たちにどのように用意していくことができるだろうか。

※：北山修『見るなの禁止　北山修著者集1』（岩崎学術出版社、1993年）

注：取り上げた事例は、筆者が様々な実際の事例を基に創造した仮想事例です。心的現実はそのままですが、外的現実状況はフィクションです。

母親の地位と男子の行方

―藤原師実家を例として―

増渕 徹
女性歴史文化研究所所長／本学文学部歴史学科教授

古典の授業で『源氏物語』を学んだとき、源氏と女性たちとの相関関係を表した図を見ながら、こんなにたくさんの女性と関係をもつとはどういうことかと些か異様に思ったものである。源氏のモデルの一人に擬せられる人物に藤原道長がいるが、たとえ一部とはいえ自分を投影した人物がこのような女性関係をもつ存在として描かれているのを、彼はどのように感じたのだろうと妄想をめぐらすときもある。

菅原孝標の娘が『源氏物語』を読みたいと切に願い、いざそれを目前にして昼夜も忘れて読みふけったことからすると、少なくとも源氏の女性関係が嫌悪感を催させるものとして否定的に受け止められたわけではないことはわかるが、他の同時代の貴族をみても源氏ほど多くの女性と関係をもつ人物を見出すことは難しい。やはり物語の人物として創作されたのだとの感を深くするのだが、ただし例外的に源氏に近い貴族もいる。道長の孫で、頼通の子でもある師実はその一人である。

師実は、わかっているだけでも妻が十人、養女を除く実子は二十人に及び、この数は同時代の貴族の中でも群を抜く。希代の色男、あるいは艶福家という評価も可能かもしれない。しかし『栄花物語』（布引の滝）の記述は些か異なる印象を受ける。

師実が姉の寛子の許に仕えていた女房に男子二人を生ませたことを述べたのに続き、「散りたる御子ども、いと多くておわします。同じほど、よそ子のやうに生ませさせたまへり」と、あちこちで子をつくった挙句、しかも他家の子であるかのように扱ったことを記す。相手となった女性は「やむごとなきにはあらで、さるべきかたちよき名とりたる所どころの中臈の人々なり」と、高貴な家出身の女性ではなく、中級貴族クラスの家の出身で美人と評判な女性であったという。こうした記述からすると、自分の家柄をかさに着て、より身分の低い家出身の美人を誑し込んでは食い散らかす、どうしようもなく女にだらしない無責任男かとの思いも湧いてくる。

師実の女性関係をめぐる行状には親族も困ったようで、頼宗（父頼通の弟・右大臣）の孫娘に何人もの子を孕ませたときなどは、さすがに伯母の上東門院彰子が心苦しく思って、女の子を自分の身辺に引き取り、身分の高い貴族の家から乳母を用意して面倒をみたと記されている（頼宗は当時すでに死没）。頼宗の孫娘が生んだ子としては『尊卑文脈』などから二人の男子が知られるが、女子は記録になく、しかも『栄花物語』は上東門院没後のこの女子の様子は承知していないと記す。なお、男子二人は師実が引き取ったという。

書きぶりからみると、女性関係をめぐる『栄花物語』の師実評は芳しいものとは言えないが、その理由はどこにあるのだろうか。私見では、中級クラスの貴族の女性が生んだ子は「よそ子」のように扱い、頼宗の孫娘が生んだ男子は引き取ったという経緯に、そのヒントが潜んでいるように思える。

師実の息子のうち貴族社会のしかるべき成員としての人生を歩んだのは、師通（関白・内大臣）・家忠（左大臣）・経実（権大納言）・能実（大納言）・忠教（大納言）らになるが、このうち師通の母は源麗子（右大臣源師房の娘）、経実・能実の母は前述した頼宗の孫娘である。『栄花物語』の記述を信じれば、恐らくこれらの男子は師実の許で成長したと考えていいだろう。とくに師通は三番目に生まれた男子ながら、母の麗子は道長家と特別な関係をもっていた具平親王家の血を引いているだけでなく、教通の子の信家の養女として師実との婚姻関係を結んでおり、誕生と同時に師実家の将来を担う嫡子として認識されていた。

それを如実に示すのが、師通と、同じ年に生まれた家忠の間にみられる格差である。両者とも十一歳の一〇七二年に貴族社会にデビューするが、その段階で師通は従五位上、家忠は従五位下と官位に差があり、以後従二位に至るまでの昇叙や参議昇任までほぼ五年の差がつき続けた。それ以降は差が大きくなり、正二位昇叙には八年、権大納言補任には十一年の差がついた。この家忠の母が、『栄花物語』が記した寛子の女房である。摂関家において正妻と次妻以下との間には明確な差があり、それが生まれた子の立場や昇進に影響することは梅村恵子氏により早くから指摘されているが、師通と家忠の格差もこの典型例になる。

師実家にはさらに極端な例も存在した。六人の女性が生んだ男子十一人が僧籍に入っているが、男子が僧俗両世界に存在する女性はうち一人だけという点である。この事実からは、引き取って育てる男子と、他家に養子に出したり僧界に送り込んだりする男子とは、その母親の地位に応じてあらかじめ区分されていたのではないかという疑いも生じてくる。

ただ注意したいのは、家忠の母はそれこそ『栄花物語』の言う中級貴族の娘であり、高貴な家の出身ではない。彼女が生んだ二人の男子のうち、兄は貴族社会に残され、弟は僧界に入った。兄が師実家の枠組みの中に残ったのは、おそらく師通と年齢が近いという条件が大きかったのではないか。もともと頼通の五男であった師実が家を継いだのは、本来の嫡子通房が二〇歳の若さで死去し、おそらくその時までに同母の二～四男は養子に出されていたからと考えられる。これと同様とすると、家忠はいざという時の師通のスペアとして、僧籍に入れられず、家に残されたのではないか。

梅村氏は、男子の子育てへの父親の関与が、貴族社会で生きていく資質を身に着ける上で大きな意味をもつことを論じている。比較的早い段階からの男子の仕分けも、父親の関与の一端を示すものと言えるのかもしれない。

（参考文献）
梅村恵子 『家族の古代史 恋愛・結婚・子育て』 吉川弘文館 二〇〇七年

2020年度 女性歴史文化研究所シンポジウム

INFORMATION

考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族

１万年以上にわたって日本列島で花ひらいた縄文文化。狩猟・漁撈・採集による食料生産を基盤としながら、長期にわたる定住生活を実現した、世界に例のない生活文化でした。縄文土器は世界最古級の焼き物という歴史的価値だけではなく、特異な造形美に対する芸術的価値も世界的によく知られています。
今回は、2021 年の世界遺産登録を目指して推薦されている「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する 17 の遺跡群のうち、女性をかたどる中空土偶や、子どもの足形を捺した土板などが出土した道南の遺跡に焦点をあてます。遺跡から出土する遺物は、当時の女性や子ども、家族のどんな姿を私たちに語ってくれるのでしょう。遺跡と遺物から、縄文～古代の家族・女性・子どもの世界を広く探っていきたいと思います。

日時

2020年6月6日（土）13時00分～16時30分

会場

キャンパスプラザ京都 JR「京都駅」中央口より徒歩約５分（ビックカメラJR京都駅店前）

講師

阿部 千春 （北海道庁縄文世界遺産推進室特別研究員／元函館市縄文文化交流センター館長）
中久保 辰夫 （本学文学部歴史遺産学科准教授）

司会・コーディネーター

増渕 徹 （本学女性歴史文化研究所所長／文学部歴史学科教授）

＜受講料＞ 無料　**＜定員＞** 250 名　＊４月６日（月）より先着順にて受付
＜申込方法＞本学HPの申込フォーム（右記QRコードからアクセス）・E-mail・電話・FAX にて受付。
①講座名 ②氏名（漢字・フリガナ） ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号を添えてお申込みください。
複数名でお申込みの場合は、全員分のお名前をお知らせください。
＜申込み・問合せ先＞
京都橘大学エクステンションセンター（学術振興課）
TEL. 075-574-4186（直通）　＊受付時間 9：00～17：00（土日祝を除く）
FAX. 075-574-4149　E-mail aca-ext @ tachibana-u.ac.jp

LIME 通信

令和最初の春を迎え、多くの新社会人が新生活をスタートさせました。

今や会社を選ぶうえで、産休・育休・時短勤務の制度が整っているかは重要なポイントとなり、さらに近年は男性の育休取得についても議論が交わされています。

平成 28 年に施行された女性活躍推進法では、101 人以上を雇用する会社には、自社の女性の活躍に関する情報・行動計画の公表が義務付けられました。そのため、厚生労働省の「女性の活躍推進企業データベース」では、2020 年１月現在登録している企業の、労働者に占める女性の割合や、育児休業取得率などの情報を得ることができます。しかし現状では、いくら制度が整っても、それらを当たり前のように利用するまでには、職場環境や人々の意識など、まだまだ変えていかなければならないことが多くあます。

今年は東京オリンピック開催の年で、日本に世界の注目が集まっています。日本人アスリートたちの活躍が期待されるように、社会面においても男女の区別なく誰もが活躍できますように。

CHRONOS（クロノス） vol.43
発行日：2020 年３月
発　行：京都橘大学　女性歴史文化研究所
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149
E-mail：iwhc@tachibana-u.ac.jp
京都橘大学
女性歴史文化研究所